

## 千葉杲弘先生退官記念 HOMMAGE

# 千葉杲弘先生について

実は私は千葉先生のお名前は、随分と昔から存じ上げている。私が教養学部にて在学した1960年代には、教育学科は第3年次に他の学科から転科するシステムで、今よりも更に小規模であった。同じ学年での男子は、私の他は心理学を専修する山本君と言う学生がもう一人いただけだったと記憶する。そんな訳でその頃から、秘書の小泉さんなどが力仕事をなさる時、よくお手伝いをした。『教育研究』や小島軍造先生がまとめられた『民主主義教育の哲学的基礎づけ』を整理する仕事もあったようである。

千葉先生のお名前を初めて目にしたのは、そうした折りであったと思う。修士論文の作成者、あるいは小島先生のお仕事の協力者として、千葉杲弘先生の名前が載っていた。後にユネスコへ赴任された事実さえ、あるいは記載されていたかも知れない。しかしその後は、長い間にわたって、千葉先生のご消息を意識することは、残念ながらなかった。次に千葉先生の名を意識したのは、私の教養学部学生の時代から20年以上も後、1991年に、故川瀬謙一郎教授の後任者として着任された千葉先生ご本人を目の前にした時であった。お名前は昔から存じ上げていたが、お人柄その他の特徴については全く未知の人物との「遭遇」ということと相成った。その後は十数年にわたり隣あった研究室で、恐れ多くも、間断なく「同僚」としてのおつきあいをさせていただいた。

この間に知りえた千葉先生のお人柄について二三。(このパラグラフでは敬語を省略)まず第一に

特筆すべきは、学生にたいする愛情である。私の知る日本や海外の大学教員で、千葉先生くらい、自分の学生たちを、徹底的に愛する人は少ない。しかし、「愛する」とは囲い込む、あるいは手放さないというのとはおよそ逆で、彼ら／彼女らを、ネパールやバングラデッシュ、ルワンダやマラウイといった途上国、しかもそうした国でも相当な奥地?へ容赦なく送り出す。(かつて別な先生の女子学生が、インドネシアへ数日間調査行きを提案されて、たちまち卒業論文のテーマを変えた、という話がうそのようである。)それでいて、あるいはそれだからこそ、千葉先生と彼ら／彼女らは益々深い絆で結ばれるようである。実に羨むべき、しかし不思議な現象である。教育学はこうした現象の解明にこそ、取り組むべきであろう。

次に、先生の実行力である。千葉先生は、何か有力な着想を得られると、すばやく、ねばり強く、そうした着想を実行に移される。何時間でもコンピュータの前に座り、提案を起草される。椅子に縛られてでもいられるかのように…しかし、少し反省してみると、われわれはそうした千葉先生から、バンコクやパリのユネスコで何十年も働かれたということは何を意味するのか、少なくともその一部を学んだのである。提案の内容は、大きな筋が明瞭で、理路整然としていて、たいてい力強い。

こうした特質を備えていられれば、大学が先生にとって、居心地のそれほど悪くない場であったであろうことは、容易に想像がつく。いつまでも

一期生の存在感を，大学に知らしめ続けて下さい。

—— 立川 明 TACHIKAWA, Akira

● 国際基督教大学 International Christian University